Journal of The Human Development Research, Minamikyushu University 2012, Vol. 2, 185-196

報告

環境教育センター第１回講演会（Ｍカフェ１）報告

「世界一幸せな国　デンマークの教育に学ぶ」

磯　部　英　良
加　藤　幸　夫*
（*デンマーク／ボーゲンセ国民学校）

日時：2011年４月16日（土）　13：30～15：30
場所：南九州大学 都城キャンパス 学生交流会館
講師:加藤幸夫（デンマーク／ボーゲンセ国民学校）

加藤　みなさん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました加藤です。日本で生活したのが19歳までということで大した日本語はしゃべれないと思います。何か変なことを言いましたら、指摘していただければと思います。

なるべく実体験を通じて、いまデンマークで起きていることを皆さまにお伝えしたいと思いますので、よろしくお願いします。

磯部　今回はインタビュアーとして、この学部の講師をしております磯部が話を進めさせていただきたいと思います。

デンマークについての基礎知識

みなさん、デンマークの教育に興味があって、これだけ大勢の方が来てくださったんですが、まずデンマークがどこにあるかとか、どういったことで知られている国なのか。「森の幼稚園」だけじゃないデンマークを、最初に基礎知識として教えていただけたらと思います。

加藤　この地図でデンマークが見えますか。とても小さい国です。デンマークの人口は、5,534,731人。大きさは九州と同じで、そう大きくありません。ですが幸福度世界一を誇る福祉国家といわれています。多分人数が少ないからできるのでしょう。

デンマークにも都道府県のように県がありますが、2007年以降、かつては13あったのが統合されて５つの州になってしまいました。それと270自治体、いわゆる市町村があったのが98に減りました。とにかく統合、統合で、経済的な部分での影響でしょうか、経費を削減するために合併なり統合なりが行われています。

私はフュン島という、真ん中の島ですね。ここに住んでいます。有名な町に、デンマーク第４の都市オーデンセという町がありますが、私はボーゲンセ市というところに住んでいます。人口が約３万人。３自治体が合併して３万人の町になったところです。

磯部　そのほかにも、この写真にあるようにデンマークといえばレゴの発祥地でして、ここにレゴの仲間のデュプロで、うちの学生がいくつか作ってくれました。それとアンデルセンもデンマークですね。

加藤　じつはアンデルセンはオーデンセ出身なんです。ですからけっこう誇りを持って、小さい島ですが、フュン島に住んでいます。

デンマークの教育制度

磯部　ありがとうございました。これから加藤さんに「森の幼稚園」について話していただきたいと思うのですが、その前に、デンマークの教育制度についても若干の説明をお願いします。

加藤　はい。さっと見ていただけると分かると思いますが、生まれて約10カ月から最初の施設、統合幼稚園。日本でいう保育所のようなところですね。という形か、または保育ママ、委託ママに入ることができます。統合幼稚園の場合はスムーズにいけますが、委託ママのほうは３歳になったら幼稚園に上がるということです。３～５歳までということになっています。これはあくまでもボーゲンセ市、私の住んでいるところの一つの例でして、いまデンマーク全土がすべてこうなっている

ということじゃないのですが。一例として挙げさせていただいています。

幼稚園が終わりますと、ボーゲンセ市が年長児クラスにあたる事前教育クラス、就学前ですね、事前教育クラスを３月１日から６月30日まで行います。学童施設の中での教育を４カ月間行うということです。６月30日といっても実際には７月いっぱいが夏休みなので、７月中も受けています。デンマークの年度初めが８月ですから、教育のほうの年末で、日本では３月にあたりますね。

新学期が８月からですが、０年生というのが本来の幼児教育学級です。多分デンマークについての本を読まれた方は分かっていると思いますが、事前教育に１年間ゆっくり使って、学校の環境、幼稚園じゃないという環境になじんでいくようになっていました。でも2008年以降、０年生が義務教育になりました。ですから教育は０から始まります。０、１、２、３と上がっていきますね。そういうふうになっています。

それで、そこの０年生から２年生の間だけ学童施設を利用することができるということで、私はそこで働いています。昨年度９月30日まで、午前中は「森の幼稚園」で働き、午後は学童のほうに勤務していました。

磯部　学童教育に関してはこの後もう少し詳しく、時間をとってお話ししていただきますが、もう一度、年長クラスがどういうことをするのか整理してもらえますか。

加藤　年長クラスというのは、学校の組織の中に備わっていて、学校に慣れるように、学校環境に早くなじめるような環境づくりから入ります。個人が、一人ひとりが慣れて、次の段階に橋渡しできるように、ワンクッション置いているというところです。

磯部　ありがとうございます。また質問がありましたら、後ほど質疑応答のコーナーでお聞きください。

幅広い保育・教育現場で活躍するペダゴーという資格について

磯部　教育制度については以上ですが、この中で加藤さんはペダゴーという資格を大学で取られてお仕事されています。このペダゴーについてもお話を聞かせていただけたらと思います。

加藤　ペダゴーというのは、ここに書いてありますが、資格を取った後の活動として、上からずらっとありますが、このような職種に就くことができます。国民学校の、いまの私の立場と同じですが、０年生学級。クラスも持つことができます。教員とペダゴーは違うのですが、０年生に限ってはペダゴーが教員として子どもたちを教えることができる。ただ１年生からは教員資格を持った人じゃないと指導できないということです。

そしてサポート教育。じつは10月１日から２月28日まで、私は０年生の学級のサポート教員をしていましたが、それと並行して学童のほうにいました。そして３月１日から就学前の教育に異動させてもらって、いまフリーで働いているところです。

この資格は、特殊学級でも働くことができます。学童施設、養護施設、養護学校。こうやって見ていただくと、生活全般のサポート教育、つまり保育士とか幼稚園の教員と同じようなことをやっています。さらに障害者学級でも働けるということは、福祉士とか介護士（であるともいえる）。とにかく生活全般をサポートするという資格がペダゴーです。

磯部　加藤さんはいま０年生の学級で働いているわけですが、例えば突然、少年院で働きたいと思ったら働けるということですか。

加藤　はい。ただ選ぶ、選ばない（採用する、しない）は職場によりますけれど、求人の最低条件としてペダゴーの資格がなければ申請はできませんということです。

ペダゴーの学校に行くには最低、高校卒業か、高校プラス社会経験があること。ですから入学の平均年齢が30ぐらいなんですね。じつは私も26歳の時に大学に入り、学ぶことができました。教育期間が３年半です。そのうち実習が１年半。３年ほど教育が行われますから、かなり実践的です。入学が年に２回あって９月と２月。そんな形になっています。

磯部　その３年６カ月の間にどういった科目を勉強されるんですか。

加藤　ペダゴーの教育は心理学や社会学が中心になって構成されています。その中に例えば衛生保健学とか生活社会学、コミュニケーション、組織の構造の学びやリーダーシップ。どういうふうな形でリーダーとなって組織を引っ張っていくかということ。そんなことを少しですが学びます。あとは音楽、美術、体育、自然環境学、そして劇。劇をするんです。それを実体験して伝える。実際にやるとどういう気持ちになるか。幼稚園なり子どもなり利用者なりがどういう気持ちになるか。自分で経験するのが大事だということで、同じレベルまで下げて教育を行っていました。

磯部　私もじつは加藤さんが出られた大学の一日体験入学をさせてもらって、カリキュラムを見せてもらいましたが、日本の教員養成と違って、ものすごく芸術、工芸とか演劇とかそういった芸術分野に力を入れているということを見て、びっくりしました。

加藤　はい。磯部さんを私の恩師に紹介することになりまして、一日だけれども、すごくいい体験をされていました。

磯部　そういうペダゴーという資格、日本人から見ると一つの資格でこんなにたくさんの活躍の場があるということにびっくりするわけなんですが、後から学童の話の中でペダゴーの資格のすごさというものを感じていただけるのではないかと思います。

いよいよ「森の幼稚園」のお話

磯部　では、いよいよ皆さんが一番関心のある「森の幼稚園」の話をしていただきたいと思います。「森の幼稚園」はとても自由というイメージがあるんですが、国が定めた基本的な教育の指針があります。これについてお話ししていただけますでしょうか。

加藤　2004年８月から、もちろん（それ以前にも）デンマークにいろんな指針、方針はあったんですが、統一をしようということになって国が定めたのが、この６つの指針です。教育目標ですね。

発達。あらゆる面における子ども一人ひとりの発達、育ちのサポートですね。社会的能力。言語・語学。言葉ですね。どのように言葉を引き出していくのかということ。体の運動。自然と自然環境。これは６つの中でも一番大事だということで取り入れています。そして文化的なものを育てる。という６つになっています。

法律ですのでいろいろと難しいことがありますが、私どものペダゴーの組合が皆さんにも分かるように、少しかわいいものが、ごく単純なもの（資料）が作ってあります。

例えば体の運動について、なぜ幼稚園で跳んだりダンスをしたりするのが大事なのか。その答えはここに書いてあります。子どもが自分の体や五感を使うことによって多くのことを学んだり、運動することによって自立心が育てられ、集中力や運動する幸福感を促進させるからだと。それが体の運動についての説明です。

もう一つ、ここに木が一本あります。子どもが描いた絵だと思います。

「なぜ、幼稚園が森に行くことが大事なの？」

「それは自然が体や感情を活性化させるからです。野外活動は子どもたちの自然に対する好奇心や、まだ分からない発見、基本的な自然を守るということの責任感を育ててくれるから」という形ですね。

これは国がちゃんと定めていることなんですよ。ですからそれに則って、各幼稚園は運営していかなくてはいけないということです。

磯部　こういった基本的な教育指針に基づいて、加藤さんがしばらく前に働いておられたドラゴン幼稚園という、いわゆる「森の幼稚園」についてお話を伺いたいと思います。

加藤　ここがドラゴン幼稚園の本部です。心臓部です。「森の幼稚園」という特別な枠の幼稚園ではなくて、でも幼稚園自体が森の隣にあるんです。当時私たちは、毎週４回は森を使って活動していました。ですから集合場所はここです。９時になるとみんなで朝の会をやって、それから「森へ行くよ」とお弁当箱を持って行きます。そして帰るのは食事の後ですから１時とか、そんな感じになります。

これが行くときの様子です。このように小さい、何と言うんですかね、リヤカーとは違いますね。これにバッグとお弁当箱と水筒とを入れて、みん

なで「よーいドン」と森に行きます。森は100メートルぐらいですね。そうやって森に入ったとたん、こうやって遊んでるんですよね。

（テントの写真を指して）じつはこれ、保護者が作ってくれたんですよ。毎年、３回か４回、保護者が週末に集まってくれて、いまのドラゴン幼稚園の教育に何が必要かということを話し合ったときに、野外活動をもっとできるような環境をつくろうよと、これを作ったんですね。やはり保護者の協力体制がかなりあり、充実した生活を送らせてもらっています。

この日は焚き火をやってますが、結構焚き火をやります。このように火を焚くことによって子どもたちが集まります。もしかしたらそれまで森の中を自由に遊びまわっていたのが、火を焚くことによって集まってきて、そこからいろんな活動が生まれていく。のこぎりを使って木を切ったり、あるいはこま取りしたりという活動をしたいという子どももいますので、それを自由にやらせることもできますよね。これです。まさしくこれです。

まず森に行ったら、焚き火ができる環境にみんなで座りまして、「じゃあきょうはこういう活動をやるけれども何か手伝いたい人がいる？」と聞きますね。そしたらこの２人が「木を切りたい」と言うので、じゃあ責任者というか、「彼が見ているから彼の言うことを聞いて木を切ってね」という形でやりますね。多分、私は火をつけるのを説明しています。子どもたちは森から小さい薪なんかを集めてきたりしてね。それで火を起こしているところです。

磯部　ちなみに最後の、赤いズボンを履いている男の子の写真は私が入れました。頻繁に焚き火をしているからでしょうね、小さい枝だったら木に立てかけて、足でポンと折るということが自然にできてしまう。そういう子どもがたくさんいましたね。

多分、森の幼稚園でもそうなんですけど、学童でもそうですが、「はい、みなさん、いまから活動をしますよ」と呼びかける姿があまりなかったのが新鮮で、何となく自然に始まっている印象があったのですが、それはどんなふうに子どもたちにさせているのか。それは意味があるのでしょうか。

加藤　はい、強制はしませんね。ただ職員はいろんな準備をしておきます。こうなったらこうなる。こういうふうな形で提供したら、来るかな、来ないかなって。いつでもいろんな対応ができるように準備段階をしっかりしています。

磯部　きょうお配りしたカラーの資料があるかと思いますが、これがじつは加藤さんが実践しておられたドラゴン幼稚園の紹介になるんですね。この中に加藤さんが写っておられますが、とても気になる文章があったんです。

「これは自然とのふれあいだけを目的としているわけではない」というようなことで始まりまして、「普段の遊びの中で友達への思いやりや付き合い方を学ばせるのが森へ行くことの狙いだ。ここには３歳から６歳までの子どもが22人いる」

次ですね。「加藤さん以外の職員は必要以上に子どもの世界に割り込まず、やさしく見守っている」という文章が書かれていて、これがすごく引っかかってしまったというか。

加藤　ということは、加藤は何をやっているんだと。森の幼稚園に対するイメージを壊してるんじゃないかと。そんなことはないわけですが。

というのは、森へ行けば自由だ。自由ということは、職員は何もやらなくていいんだ。子どもたちは自立的に、自主的に活動を探してやっていくのだから、職員は何も手を掛けちゃいけない。そういうんじゃないと思うんですよ。先程の指針、この６項目は森でだってできることなんです。それをやはり事前に研究をして、職員との話の中で、どういう方向性で一人ひとりの子どもに手を伸ばしていくか。個人個人に合うものをどうやって提供しようかということを事前に、皆さんもやってらっしゃることだと思うんですけども、準備をしているんです。ですから、何もやらないじゃないんですよね。これを読んだとき、「はあ」と私は思ったんですが、「加藤以外は」と書いてあると、やはり森の幼稚園のイメージを壊しているように思いますね。

磯部　森の幼稚園というと、森に行って自由に遊ばせる。大人は何もさせることはしない。とにかく自由に遊ばせるのがいい。それをやっていると

いうイメージですが、決してそうではない。かなり事前に入念な準備をして森へ行っているんだということですね。

加藤　はい。例えば自然環境を学ぶということについても、木はどうして倒れているのかということをどう話せばいいのか。それが、みんながみんな同じ時間帯に「はい、こっちに来て。やりましょう」ということはしません。興味を持たせるためにどういう形で彼らの好奇心を引き出すのか。そういうのは準備段階で職員との打ち合わせでやっておかなければいけないことですね。それで食いついてきたら、子どもの目線でどういうふうに伝えていこうかと。そういうテクニック。

いわゆるペダゴーの教育は心理を元に構成されている授業なので、発達心理ですが、そういうふうなことで活動して、どういう形で子どもは興味を持ってくれるのかな（というのを学ぶ）。そこが逆に言うと子どもの自立ですよね。自分で決定していく。そういうお膳立てをするのが私たちプロであるということです。

重要な役割を担う「学童施設」

磯部　森の幼稚園について質問があれば、質疑応答の時間に聞いていただきたいと思います。では次に学童の話に移りたいと思います。

日本で学童というと、学校が終わってから親が帰ってくるまでの数時間だけ子どもを預かる場というイメージだと思うんですが、デンマークではそれが違うんですね。

加藤　はい。デンマークでは共働きの家庭が多いので、うちの学童は朝の６時から午後５時まで開いています。学校が始まるのが８時15分で午後１時まで。低学年ですからそれぐらい短いんですけれども。その前後、私たちスタッフが子どもたちを見守っていると。

私の職場、ボーゲンセの国民学校ですが、いま就学前の子どもたちを含めると約180名の子どもがいます。それをスタッフ10名ぐらいで相手をしています。

磯部　学童の様子の写真を見せていただきたいと思うんですが、ほとんどの学童が国民学校に併設されているので、授業が終わった子が、簡単に自分で歩いていけるということになっているんですね。

加藤　学童の需要ですが、低学年ですが、90％以上の子どもが利用しているということ。イコール、共働きの家庭が多いということです。

学童は自由を尊重するということで、「これをやります」「あれをやります」ということは言いませんが、やはり子どもたちの興味を持つようなことを、事前にいろいろスタッフで話をして研究をして、子どもたちがかみついてきたら、「こういうふうにやるんだよ」という形で指導、教育していくという形になっています。

これが０年生と１年生ですね。これが２年生。こちらが事前教育の子どもたち。ついこの間始まったばかりの子どもたちです。２年生のクラスの写真を撮らせてもらいました。これはうちの次男です。こんな感じです。暗くてよく見えませんね。

これは就学前の子どもの一人ですが、自転車に棒が刺さっているのが見えますか。じつは彼、自転車に乗りはじめたんです。その前は父親と一緒に歩いてきていましたが。彼が入ってきて最初に言ったのが、「幸夫、ちょっと話がある」と。「ぼくね、自転車に乗れるようになったんだけど、まだちょっとね…」と、いろいろと説明してくれるんです。それで「自転車に乗るときに、後ろに立っている棒を持ってバランスを取ってくれ」と言うんですよ。「いいよ」と。計画していた活動を終えた後だったので、その棒を持って５周ぐらいですかね。その間延々と彼は語っているんですが、「うん、そうだね。そうだね」と私は相槌を打ちながらついて行きました。この出来事はとてもよかったですね。いい運動になりました。こんな感じですね。ほかの子たちはもう自転車に乗れるんですけどもね。

これが学童の施設ですが、大きさが伝えられるかなあ。結構大きいんですが、180人にもなると本当にフルハウスになります。

ここに大きい穴が開いていますが、特別に囲いというものがないんですね。じゃあどこまで行っていいのかということを、暗黙の了解で子どもたちに教えます。

磯部　私がおもしろいと思ったのが、学童ではスタッフが子どもたちのランチを作るんですよね。

加藤　はい。作るんです。さすがに就学前の子どもたちを受け持っているスタッフはなかなか手がつけられないのですが、学童のスタッフは10時くらいに来て、10時から１時の間、そうですね、180プラス職員ですから200食くらいの食事を作ります。手作りで、パンなりスープなり野菜もそうですけど、200食分ぐらい作りますね。

磯部　しかもデンマークの国自体は４回食事を取るべきだという方針ということですよね。それで食事を提供しているんですか。

加藤　４回というか、多くですね。多く食事をしたほうがいいということです。例えば、朝食べますね。学校では10時に１回食べます。学童に来て１時に食べます。それでうちに帰って食べます。最低４回ですね。

磯部　しかも学童の、結構広い建物の真ん中にキッチンがありますね。

加藤　ちょうど入ってくると、子どもたちも保護者もそうですが、すごい香りが充満していて、それが感覚的な刺激となって、「ああ、お腹がすいてきた」と言って食べる。そしたら血糖値もどんどん上がって、コントロールもよくなって、また次の活動に備えられるという（いい循環ですね）。

磯部　先程、加藤さんのお話にもありましたが、デンマークの子どもはどの国の子どもに比べても、施設、集団で過ごす時間が一番長いということで、本当に家庭的な雰囲気をつくっている。その中心が台所であって、台所のすぐ横に大きいテーブルがあって、まるでお母さんと子どもたちに見えるような雰囲気づくりがしてある。ろうそくまで置いてあるんですね。

加藤　本当にアットホームにしてあって、その形は意識して取り組んでいるものがありますね。特別な施設というふうにするのではなく、名前をロイローブルといいますが、意味は鍵穴ですね。子どもたちがキーポイントになる。子どもたち自身を尊重して受け入れられる鍵穴でありたいという意味です。

デンマーク流、“危険”とのつき合い方

磯部　なるほど。キャンドルのことで思い出しましたが、子どもたちが走り回っているような建物の廊下にもキャンドルが置いてあるところがあって、「そういうのは危険じゃないの」と聞くと、「気をつけて歩くようになるでしょう」と言われました。のこぎりを使うことに関しても、日本人から見るとものすごく危険で、親はなんて言うのとはらはらするような場面がいくつかあって、危険との付き合い方というものが日本人とデンマーク人とで違うと思いました。その辺のことについて何かお話がありますか。

加藤　そうですね。やはり体験してみなければ分からないものってありますよね。多分、昔はそんなに厳しくはなかったですよね、日本も。やっぱり落ちてみてこれが痛いんだ。手を切ってみて、血が出る。痛いんだ。もちろん、けがをしたら処置はします。でも自分の体内に何があるのかということも学べますよね。不幸中の幸いで。やはり実体験をさせる。けがするから取り除くじゃなく、実体験をして学ぶためにそこに置いておくということを、ほぼ100％、どの施設でもやっています。

中には学童生活の中で、高いところから飛び降りて骨折した子もいます。でもその時に職員がまず何をすればいいかということ。どういう処置をすればいいかということ。それが徹底していれば保護者も別に怒ったりせず、「ああ、そうだったんだ」と理解してくれる。それがデンマークの社会ですね。

磯部　ありがとうございます。先程出ましたが、学童で働くためにペダゴーという資格が必要だということですが、日本では必ずしも資格を必要としません。そのことについて何かありますか。

加藤　そうですね。やはり子どもを預かっている責任というもの。いまどういう状況で子どもたちがいるかということを理解しなきゃいけない。認識しなきゃいけない。ただ楽しいから。もちろん子どもたちとふれあうのが楽しいということは大切だと思います。けれど専門的に子どもたちのそれぞれを知ること。それぞれをケアするためには子どもたち一人ひとりの精神的な、かついまの状態を理解しなくてはいけないということで、専門

的な部分で入らなければいけない。もちろんスタッフ全員が資格を持っているわけではありません。だけどスタッフの中に必ず知識をもった方がいないと、学童という組織の運営はできないと思います。

磯部　ありがとうございます。学童についてほかに付け足すことがなければ、いったんここで休憩に入りますが。

加藤　映像をお見せしましょう。

これは朝の会の状況です。よく見ていただくと分かると思いますが、子どもたち、すごく統一感がないですね。ちゃんと座ってる子もいれば、立ったりくねくねしたりしてる子もいる。

（手遊びの場面）やっている子もいれば、やってない子もいます。

次に私が出しゃばりまして。…終わりました。一番大きな声が私でした。

まずは、先生が楽しむ

磯部　じつは加藤さんもそうなんですが、私がデンマークに行って、学童でも森の幼稚園でも小学校でも一番印象的だったのが、とにかく加藤さんをはじめとする先生たちがとても楽しそうだったんです。一番楽しそうにしているのが先生たちで、それを見て子どもたちも「何やってるの」と寄ってくるのを何度も見ました。それが秘訣なんですか。

加藤　やはり自分自身が楽しくなければ、やりがいがなければ伝える側に失礼ですよね。自分が楽しいことは共感できる。伝えられる。楽しいから分かち合える。それは必要なことです。それを大切にして、学童も幼稚園も、自分が本当に興味の持てるものを子どもたちに提供するんです。

磯部　自分が興味を持っていること、そういう経験のことを何というんでしたっけ。

加藤　デンマーク語ではリュックサックというんですよ。リュックサックというのは、人それぞれ大きなものもあれば小さなものもあります。ただ、どんどん詰めていける。詰めていって詰めていって、常に身に着けていつでも行動できるので、そう言っています。

磯部　それではここで休憩に入り、その後、質疑応答の時間にしたいと思います。

遠藤　ありがとうございました。本では分からないことがいろいろ聞けたと思います。とくに私にとって目からうろこだったのが、私のような野蛮人は、ただ森に行ってがけから蹴落として上がって来いというようなことが森の幼稚園かなと考えていたんですが、そうではなかった。きちんとした教育方針があって、それはどこでもできるんだけど、それを森でやっているのが森の幼稚園だということ。森へ行くことが目的ではなく、６つの教育指針を達成するためにどうやっていくかということで、森を使っているということがよく分かりました。

それからやはりデンマークという国が、個々、一人ひとりを見ている。一人一人にあった教育を森の幼稚園でやっているということ。

また日本で学童というと放課後帰る場がない子が行くというイメージですが、そうではなく、積極的な教育の場であるということがよく分かりました。

＜休憩＞

遠藤　では質疑応答に入ります。せっかくデンマークの話を聞かせていただいたので、デンマークのこと、それからこの会の目的として、デンマークの話を聞いて、われわれとしてはこれからどうしていこうかということなど、そういうことをお聞きください。

質問者１　ひとつお尋ねしたいのですが、私が小さい頃、いま映像に出ていたようなことが日本では家庭で行われていたと思うんです。いまは核家族化が進んで環境も激変してしまいましたのでできなくなりましたが、昔はみな、森に秘密基地があって、森に遊びに行っていろんなことを培って学んで大きくなっていった。社会性とか、大きい子が小さい子を面倒見たりとか。川だって監視人がいないところで遊んで、どこが危険だとか、どこは遊べるとか、どこに魚がいるとか。そういうのがデンマークでも（あったのか）。森の幼稚園があるのは、時代背景として（そういうものがあったのか）。昔はどうだったのか。いまはどうしてこういうことになっているのか。そこをお尋ねし

たいと思います。

加藤　それは一つの理由が共働き、女性の社会進出というのが大きいと思います。それをデンマークの国はすごく斡旋していますので、それは大きな理由だと思います。

質問者２　日本では学童保育には定員があってなかなか入れないんですが、そちらでは９割の小学生が入っている。ということは誰でも入れるということですか。

加藤　はい。

質問者２　全員ではなく、希望者ですね。

加藤　はい。そしてお金がかかります。約３万５千円。レートによって違いますが。

質問者２　朝早くから。朝ごはんはどうするんですか。

加藤　朝６時からやっていて、朝ごはんも作ります。日本の朝ごはんとは違いますが、手作りのパンとミルクなどを提供しています。

質問者２　そして午後もあって。

加藤　午後１時から５時まで。学校の敷地内にあるので、授業が終わったらそのままやってくるという感じですね。

質問者２　親御さんは安心して働けるということですね。

質問者３　先程デンマークは核家族が中心とおっしゃっていましたが、おじいちゃん、おばあちゃんはどうしていらっしゃるのか、子どもたちとふれあう時間はどうされているのかということをお聞きしたいと思います。

加藤　どこから話せばいいですかね。高齢者の方で生活能力が低下した方に限っていうと、特老とか特養とかに入れますし、それまで、ちょっとした介護でよければ訪問介護なども受けられて、介護福祉士などがサポートしています。幼稚園では日本でもやっているように、高齢者施設を訪ねて交流したりしています。

質問者３　日本でも昔は家庭の中で高齢者とふれあうときがあったと思うのですが、それがだんだんなくなってきています。デンマークでも自然とふれあう姿はありましたが、その中で高齢者を見かけなかったので、そのあたりが気になったところです。

加藤　よくおじいちゃん、おばあちゃんがお迎えに来られるというところもいっぱいあります。デンマークでは仕事が週37時間と決まっていて、これは日本より少ないですね、でも両親が迎えに来れないときにおじいちゃんたちに頼むということは多々あります。また幼稚園でもおじいちゃん、おばあちゃんの日というものを設けていて、早退して一日中一緒に過ごすこともあります。またクリスマスなどのケーキを作るときに来てもらって一緒に活動したり、いろんな活動に参加してもらったり、いつでも来てくださいという形でオープンにしています。

質問者４　２つの質問と１つの事例を紹介したいと思います。

まず質問ですが、南九州大学が都城に移る前は高鍋だったんです。そこに高齢者のサービスと児童養護の施設保育所が一つになったものがあって、そこでお年寄りと子どもの交流をしようとしたんですが、生活のリズムの違いや意思疎通がうまくいかなかった。うちの大学が入ってやっと交流できたので、職員の意思疎通など難しいと感じています。

一つ目の質問ですが、うちは学生と一緒になって近くの児童館などで一緒に畑をやっているんですが、向こうでは学童や幼稚園で、このように学生が行くということがあるのでしょうか。もう一つは、畑の写真が見えなかったので、そういうことをしているのか教えてください。

加藤　二つ目の答えからいうと、一般的な幼稚園では畑はあまりやっていないかもしれないですね。ただ農場幼稚園はあります。それも農場一本でやるのではなく、自然を踏まえた形でやるんです。そういうミックスの、混合の幼稚園はあります。

一つ目のほうは、私は学生が教育ファームなどでそういうことをしているのは知らないんですが、磯部さんのほうが…。

磯部　いままでのいくつかの質問にまとめて答える形になりますが、私がデンマークに行ったときに、ある特殊な学童を見せていただきました。それはいま加藤さんが言われた教育ファームだったんです。どういうところかというと、４Ｈグルー

プというキリスト教をベースにしたもので、もともとはアメリカのものだったんですが、それをデンマークでされている人たちが農場を借りて、そこを学童にしている。そして週に１回は、子どもによって違いますが、親子で来たりして、農場で過ごすということをしています。

どうしてそういうことをするかというと、日本と同じでデンマークも自然の中で関わるということが減ってきていて、意図的にそういう機会を設けないとなかなか遊べない。しかも先程、畑が見えないというお話がありましたが、全部畑と言っていいくらいの国土なんですよね。家と家がものすごく離れているから、放課後子ども同士で遊ぼうといってもそれができないので、そういった学童や教育ファームで子どもたちが集ってウサギの世話をしてみたり、自分の畑がもらえますからそこに好きな種を植えたりして、１年に一度、一番大きなジャガイモを育てたのは誰かというようなコンテストをしている学童もありました。

高齢者については、これも日本と同じで、いまの30代、40代の方は自然の中で遊んだ経験というのがなくなっているんですね。そこで伝統が途切れてしまっている。編み物もすごく大事な伝統工芸ですが、やる人がいない。オートミールがオートからできているということを知らない人もいるぐらいに、自然の知識というものが30代、40代の人でなくなっているということがありますので、教育ファームでも高齢の方がインストラクターとしてやってきて、なくなってしまった伝統を子どもたちに直接伝授する機会にもなっています。伝統料理を子どもたちと作ったり、編み物を教えたり、農場で動物や作物の世話はこうするんだよと教えたりしていて、日本でもそういった取り組みができたらいいなと思いました。

質問者５　私は音楽を通して子どもに関わっているんですが、すばらしい子どもを個々に育てていくと社会に不適合を起こしてしまうということがあって、その子の自由度が社会の規律と違ったりして悩むことがあります。その点デンマークは、これだけ国の方針を持っていて国民のコンセンサス、共感が得られているということがすごいなと感動しました。そこでお聞きしたいのですが、私はここの生まれなので、雪すら知らないぐらいなんですが、冬の遊び、デンマークならではの興味深いものがあれば教えてください。

加藤　いやあ、すごく大変な質問をありがとうございます。

すばらしい子どもですか…。デンマークは個々を大事にすると、文字通り書いてあるとおり言ってしまったんですが、それが逆に我が強くなって、コミュニティーが団結しないといけないときに問題を引き起こすということが多々あります。正直な話ですね。小さなミーティング一つでも、私はこう思う、私はこう思うということがあります。過保護というと言葉が悪いですが、あなたはそういう考えなのね、偉いねと育ってきたので、小さいときに少しおませな子どもが多くなったりします。１年生、２年生になって、「お前が決めるんじゃないんだけど」とか、「お前になぜ言われなきゃいけないの」と言われることが普通にあります。いまでもちょうど…、はい、すごいです。

で、冬の遊びですか。じつはデンマーク、雪が少ないんですよ。この冬と昨年の冬はかなり雪が降って、気温もマイナス17度から20度で、とても痛い、痛寒いんですが、そういうのがあったのはもう40年、50年前のことなんです。気温はマイナス10度ぐらいに下がることはあるんですが、雪はあまりないので、遊ぶとしたらスケートですかね。川とか海が凍るので、スケート靴を持っていったりというのが多いですかね。結構暖かいです。異常気象もあるんでしょうか。

質問者６　私は４年間、教育現場に携わらせていただいたんですが、教育現場で何を子どもたちに求めているのかというと、生きる力をはぐくむということなんですね。ところが、子どもが育っていない状態で上がっていきますから、いろんな問題を引き起こすわけです。デンマークの教育システムを見たときに、就学前教育をしっかりされているということ、乳幼児期と学童期のつなぎをしっかりしているということで、こういう体制が取れていたら日本の教育現場の問題もきっとよくなるだろうと思いました。

ここに来ている皆さんはいかに環境教育が大切で、それによって生きる力がはぐくまれるかとい

うことをご存じだと思いますが、分かってはいるけれども、子どもたちにどのような形で提供してどのようにアプローチしていけばいいのか、そのヒントが欲しくて来ていると思います。私は、それは地域によってアプローチの仕方が違うのかなと思いました。

実際に県南地区でエコ活動をしている方が、学校環境に入っていくことを実践されていますし、私は都城に大学がある、園芸学部と連携しながら発達を考えていく学部があることをすごくうれしく思っています。この大学が、南部教育事務所とかありますね、そういう教育機関といかに連携して環境教育をとりいれているかということが知りたくて、きょうは来ました。進行状況などを教えてください。

遠藤　私は沖縄の小学校で、沖縄にケラマジカという鹿がいるんですが、その研究を８年ぐらい前から、子どもたちと一緒にやっています。３、４年生の総合学習の時間に、ケラマジカについて徹底的に調べるということを２年掛けてやっています。何を調べるか。ケラマジカを調べることは決まっているんだけれども、その何を調べるかは子どもたちが決めていく。話し合って決めていく。出てきたデータをまとめていくのも子どもたちでやる。最終的には発表までやるんですが、これを２年間していく。じつは毎年沖縄の生物学会という学会があるんですけれど、そこで生物の専門家に混じって、100人ぐらいの専門家の前で小学校５年生が発表するということを、もう８年ぐらいやっています。

きょうのデンマークのお話を聞いて非常に共通点があると思ったのですが、私が沖縄でやっているのはケラマジカのスペシャリストをつくっているわけでは決してなくて、ケラマジカ研究という手段を使って、子どもたちが先程言われた生きる力というんですか、自分で感じ、考え、それを表現する。そういう力を総合学習の時間を通して、子どもたちにはぐくんでいる。自然を使うというのは単なる一つの手段にすぎないということを自分では感じていて、きょうのデンマークのお話を聞いてそれを実感しました。

それでこの学校が去年から立ち上がったばかりで、なかなかまだこの都城地域での展開が進んでいないんですけれど、一ついま考えているのは、御池の小さな小学校でそういう取り組みを始めようと考えています。自然が豊かなへき地の小さな学校というのは、単なる自然豊かな学校という位置付けだったんですけれど、きょうの話、沖縄の経験を踏まえて考えると、じつはいまできていない、まさに生きる力をはぐくむというとっても素敵な先進的な教育ができる場であると思い変えることができるということですね。そのお話につきましては、じつは８月６日にこれと同じような会合を開こうと計画していますので、どうぞ、ご参加ください。

本日は、ありがとうございました。

「デンマークの教育に学ぶ」会場アンケートの回答

来場者83名：　アンケート回答者：47名

１．あなたのご職業は？

保育士	20名
大学教員	４名
教員以外の公務員	２名
会社員	２名
自由業	５名
学生	５名
その他	９名

２．今回の講演会をどのように知りましたか？

案内チラシ	11名
南九大ＨＰ	２名
センターブログ	１名
知人等から	21名
その他	８名

３．講演会についての感想

・森の幼稚園はただ遊ぶだけではなく、きちんと教育の指針があって、それに基づいて教育を行っていることを初めて知り、大変勉強になりました。将来学校の教師として何かできることはないか考えていきたいと思います（学生）

・加藤さんのお話、会場に来ている皆さんのお話を聞いて、日本の教育を変えていきたいと思っ

ている人はたくさんいるんだなと感じました。日本だってできることはたくさんあると思います。もっとキラキラした子どもを育てられるように、大人自身が輝いていきたいと思いました（公務員）
・バッチリですよ（自由業）
・日頃とても関心を持っていることなので、今後も続けてほしいです。ありがとうございました（自由業）
・教育についてよいことを一生懸命研究、実践されている先生方がいっぱいおられて、力づけられました。加藤先生、デンマークでがんばり続けてください（自由業）
・大変勉強になりました。ありがとうございました（保育士）
・加藤さんのお話は知らない国の教育から日本をみつめるきっかけになるよい時間となりました。教育関係者の方から出る“生きる力”ってどんなものだろうと感じました（その他）
・デンマークのロラン島は、エネルギー自給率100％の島です（料理人）
・国をあげての幼児教育システムがすごいと思った。国が変わらないと（意識が）日本もだめなのか？いえいえ…独自にやりますよ！！（保育士）
・対談形式で、加藤さんの良さやおっしゃりたいことを引き出されたのが大変良かった。日本とデンマークの決定的な違いがよくわかりました。その違いを補うために、まず、その気になった人を核に、持続していくことだと教えられました（子育てアドバイザー）
・資料がほしかった（学生）
・とてもおもしろくてビックリするような事もたくさんでしたが、今後の仕事に役立てていきたいと思いました（保育士）
・普段かかわりの余りないデンマークの教育体制を知ることができ大変興味深かった。子どもの教育方法のノウハウは個人や教育機関等を問わず活用できると思われるので、実践的な講演であった（その他）
・デンマークに行ってみた～い！と感じる中、正直に話される先生がとてもすてきでした（保育士）
・先生の雰囲気から、ドラゴン幼稚園ののんびりした雰囲気を感じました。危険なものが置いてあっても、その危険を省くのではなく、体験してみて気づく。その実体験は本当に大事であると思いました。私も楽しんで子どもたちに共感してもらえるような保育をしたいと思います（保育士）
・デンマークのことは全く知らなかったので面白かったです（学生）
・自分の生徒たちへの接し方にとって、とても参考になりました（塾講師）
・教育に関しての概念が増えて、とても有意義な時間でした（学生）
・実際にデンマークで働かれている方の生の声を聴けて、とてもよかったです。ぜひ、また同じ形での企画を楽しみにしています（大学教員）
・ボーイスカウト活動のヒントになりました。ありがとうございました（消防士）
・子どもに戻りたい、遊びたい、学びたい！（その他）
・自国の子供たちにおろす時、自分たちの問題意識がしっかり見えていないと、ぼやけてしまうと思いました（保育士）
・乳幼児、小学校への移行がスムーズにできればよいと思いました。ありがとうございました（保育士）
・学童の重要性、必要性を知りよかった。まず、自身が存分に楽しみ、それを子どもたちに提供していくことを忘れてはいけないと思った（保育士）
・デンマークを通して、日本の教育はどうなのか？自分の保育者としての力不足もすごく感じた時間でした。今後は何からとりくめばいいのか、まだまだ勉強していきたいです（保育士）
・デンマークの教育にとても興味を持ちました。自分の保育園にそのまま取り入れることは無理かもしれませんが、できることをやってみたいと思います（保育士）
・実践されている方のお話は説得力がありました。非常にわかりやすく、楽しく聞かせていただきました。ありがとうございました（大学教

員）
・子どもを育てていくにあたって、ヒントになることがたくさんありました。有意義な時間をありがとうございました（自由業）
・もう少し詳しく話を聞きたかった。またトントンさんのお話を聞きたいと思う（自由業）
・加藤さんはとても正直だと思いました。実体験から（その他）
・デンマークの教育を特別視するのではなく、そのデメリットにも触れて話に現実味がありよかった（会社員）
・熱い思いの方がたくさんいらっしゃってて、しゃべり足りない方もけっこういらっしゃったようなので…先生の事例発表の後、小グループで熱く語る会があっても面白そうですね（公務員）
・かなり勉強になりました。今後、勉強したことを生かしていきたい（大学教員）
・自分のおかれている環境をどう生かしていくのかを考えました（保育士）
・西欧の教育に関心がありましたので、現場の方のお話は､わかりやすく憧れる部分はあります。自園で、どのように活かせるか課題も見つかりました。ありがとうございます（保育士）
・日本のすばらしい昔ながらの原風景がそこにある保育を私たち保育士のあるべき姿（子どもの育ちにそっと寄り添いながら共感しあいともに育っていく等）を改めて考えるいい機会となりました。ありがとうございました（保育士）

４．今後の講演会において希望するテーマ

・環境教育の実践を具体的に進める又は実践例など紹介していただけると嬉しいです（自由業）
・一歩ずつ進んでいけるような希望が持てるような内容（自由業）
・環境、エネルギー教育について（自由業）
・質の良い保育とは。幼保連携の実態（子育てアドバイザー）
・公害について、発展途上国の環境問題（学生）
・森の幼稚園について詳しく話を聞いてみたいです（保育士）
・どのような活動（子どもたちが興味を持つものについて）知りたいです（保育士）
・森の幼稚園、自然の中での様子をもっと知りたい（保育士）
・人と森との関係のような、森の中で人が生活することでどう変われるかなどの話をききたい（学生）
・いろんな国の教育制度または活動（ボランティア）を知りたい。
・幼児ではなく、もう少し上の学年の子どもたち（小学校高学年～中学生くらい）への教育方法、実態を知りたい（塾講師）
・真の保育、自然環境を大切に考える、保育にいかせる講演を願う（保育士）
・日本の自然教育について。学童のありかたについて。森の学校の進め方や、はじめから、現在の姿。保育士としての必要性（保育士）
・自然と人が調和して生きていけるような環境づくりについてなど（自由業）
・今後の日本教育をよりよくしていくために、地域や人々が何を協力し合うべきか、ディベートなど（自由業）
・文化人類学（比較）（その他）
・生涯発達という視点から考えた「教育」というもののあり方（会社員）
・子供会（育成会ではなく、子どもによる子どものための子ども会）をもっと活かせないものでしょうか。今までの子供会は、公民館組織の中にあるため公民館の弱体化と同時に存続が難しくなっていますが、新しい地域コミュニティの中で、PTAではなく、地域の大人がみんなで支える子ども会ができたら…と思います（公務員）
・今回みたいなテーマでよいです（いろいろとためになるので）（大学教員）
・自然環境をどう利用していくのか（保育士）
・日本の中での環境教育の実践をされているところの方の講演（保育士）
・この続きをもう一回（保育士）